

秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察 —弘前・酒田・山形との比較検討—

Some considerations about the publication area of "OURAIMONO" documents of Akita Prefectural Library possession —Comparison with those of Hirosaki, Sakata, and Yamagata—

郡 千寿子*
Chizuko KOHRI*

要 旨

継続的に行ってきた東北地方の往来物資料調査について、特に所蔵状況を考慮したうえで、秋田県立図書館を起点として、弘前市立図書館、山形県立博物館教育資料館、酒田市立図書館光丘文庫所蔵の資料群との比較検討を試みた。秋田県立図書館における近世期の往来物資料の版本所蔵状況は、総数51本であり、目的別の分類では他地域に比して特に理数科往来の存在が際だっていた。他方、出版地別に分類した結果についてグラフ化し、他地域との比較も含めて提示した。結論として、秋田県立図書館所蔵資料は、京都・大坂といった関西圏で刊行された文献が多く所在していることが明らかとなった。出版という側面からみた、秋田における関西文化の流入や受容といった傾向について指摘することができ、それぞれの地域における教育環境や文化的背景の共通点や相違性など、新たな視点からの研究の可能性を示唆したものである。

キーワード：往来物、出版文化、秋田、庶民教育、理数科往来

1 研究の方向性について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究¹⁾をすすめている。従来の研究は、教育史資料としての扱いであったが、人間文化形成に果たした役割や地域社会に与えた影響など、往来物資料は、多くの未開拓課題究明の可能性をもっている。

日本社会の近代化に往来物資料が、大きく関わっていたことが予想されるのであるが、文献資料の基礎的研究をはじめとして、その発掘も未だ十分にはすすんでいない現状にあり、そうしたことをふまえて、東北地域の往来物資料調査を通して、近世期の庶民生活の一面や教育的背景について考えてみたい²⁾と思う。また、近世期には出版文化が盛んになった時期でもあり、そうした側面からの考察検討も重要であるだろう。

本稿では、秋田県立図書館所蔵の文献資料調査から、往来物資料の出版地域について紹介し、分類と整理³⁾を試みた結果を提示した。また、その調査結果を弘前市立図書館および山形県立博物館教育資料館、酒田市立図書館光丘文庫の所蔵状況と比較することで、日本海海域と内陸地域の往来物資料所蔵の偏在についても考えてみたい。

2 東北所在の往来物資料調査について

秋田県立図書館所蔵資料の調査については、すでに目的別の分類結果を公表³⁾している。またそれに先立ち、弘前市立図書館、八戸市立図書館、岩手県立図書館の所蔵往来物資料についての文献調査⁴⁾も行なっている。北東北地域に限らず、南東北地域の山形県でも調査をすすめ、酒田市立光丘文庫と山形県立博物館教育資料館においても、所蔵往来物資料を分類整理³⁾した。原則として、写本は除き、版本に限って、成立時

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

期や出版元を確認し、それらを目的別と出版地別に分類整理して所蔵資料の特徴について考察検討を続けている。

写本を除いたのには意味がある。この研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。すべてを詳細に検討するよりも、大要を明らかにするために調査資料をより限定して考察検討する方法をとった。

以上のように北東北および南東北の一部ではあるが、資料調査を実施してきた結果をふまえて、秋田県立図書館所蔵資料の特徴的と思われる一面を紹介しながら、弘前と山形、酒田所在の資料との比較検討を明示してみたい。それぞれの地域における往来物資料の調査結果を基礎として、今後、文献資料の存在意義をはじめとして、地域の教育環境や文化特性などの考察検討につなげてゆきたいと考えている。

3 秋田県立図書館所蔵の「往来物」を起点として

3-1 近世期版本の目的別分類所蔵状況

秋田県立図書館所蔵の文献資料調査の結果、往来物資料と判定した近世期版本は、総数51本であった。拙稿³⁾においては総数50本として報告したが、今回の再調査により修正しておきたい。蔵書番号「6. 61. 726」の『姫鏡』(10冊本)は、従来ひとつの文献資料として扱われていたが、詳細に検討した結果、10冊本の『姫鏡』でなく、『姫鏡』4冊本、『比売鑑』6冊本、と二種として別々に扱うべきものであると判断した。

歌、薫物、衣服などについての絵入りの女性教養書である『比賣鑑』は、異称として「日売鑑」「ひめかゝ見」など様々種々のものが、当時、流布していたことが知られている。『小学』の教えを敷衍した女子用の教訓書で、広く読まれたものである。秋田県立図書館所蔵本は、概観が10冊とも同様であり、従来10冊本と認識されていたようだが、4冊本と6冊本として二種のものとして扱うべきであり、この点については後述したい。

総数51本とした近世期版本の他にも、近代明治期以降に出版された往来物資料も多数所蔵されており、書

写本まで含むとするとかなりの所蔵数が確認された。近世期版本の他の資料については今後の課題としておきたいが、本稿で研究対象とした秋田県立図書館所蔵の往来物資料の中には、北東北の他地域一弘前市立図書館・岩手県立図書館・八戸市立図書館一には所蔵が見られない、珍しい文献資料が多く確認されたことは興味深い結果であった。

目的別の分類整理から特徴を挙げるとすれば、理数科往来の多さであり、16本の所蔵が確認された。弘前市立図書館や岩手県立図書館には、所蔵が見られなかった理数科往来資料であるが、秋田県立図書館では、総資料数に占める割合が最も多く、32%を占めていた。

酒田市立光丘文庫においても、理数科往来資料は、33本と多数であった。こちらは総資料数が163本であるため、全体に占める割合でいえば20%であり、酒田においては女子用往来42本の25.8%が最多のものであった。山形県立博物館教育資料館における理数科往来資料は、1本であったが、総資料数109本であるため、全体に占める割合は0.9%にすぎないことが知られる。

理数科往来については、その時代的背景や当時の思想からの影響で、近世期の版本は少ないといわれてきた⁶⁾。こうしたことを考え合わせると、秋田県立図書館所蔵の理数科往来資料は、『国書総目録』にも記載がない未確認未詳の重要な文献であり、その開拓と紹介は意味のあることだと思われる。秋田県立図書館所蔵における目的別分類において最多である理数科往来資料は、他地域の所蔵状況とは明らかに相違した特徴であるといえよう。酒田市立光丘図書館にも33本と多数の理数科往来資料の所蔵が確認できたが、秋田県立図書館とともに、その地理的な立地が、日本海沿岸であることにも注意しておきたい。

3-2 近世期版本の出版地別所蔵状況

所蔵資料の出版地域別に分類整理⁷⁾した結果について【表1】としてまとめてみた。

目的別に分類した結果と合わせて出版地域について示してみたが、総合すると、江戸19本、京都13本、大坂8本、秋田1本、名古屋1本、不明9本ということになる。ここで注目すべきは、関西圏としての大坂、京都の出版である。江戸19本に対して、大坂と京都を合わせて関西圏として考えると大坂の8本、京都の13本で21本ということになり、江戸より関西圏が多いと

【表Ⅰ】秋田

教訓科往来	6本	江戸	2	京都	1	大坂	2	秋田	2	不明	1
語彙科往来	5本	江戸	1	京都	4						
消息科往来	4本	江戸	4								
歴史科往来	2本	江戸	1							不明	1
産業科往来	4本	江戸	1			大坂	1			不明	2
理数科往来	16本	江戸	5	京都	4	大坂	3	名古屋	1	不明	3
女子用往来	14本	江戸	6	京都	4	大坂	2			不明	2
計	51本	江戸	19	京都	13	大坂	8	その他	3	不明	9

【表Ⅱ】弘前

教訓科往来	30本	江戸	25	京都	4	大坂	1				
社会科往来	24本	江戸	16	京都	3	大坂	5				
語彙科往来	19本	江戸	16			大坂	1	仙台	2		
消息科往来	41本	江戸	35	京都	3	大坂	2	仙台	1		
地理科往来	14本	江戸	11	京都	2	大坂	1				
歴史科往来	33本	江戸	30	京都	2			仙台	1		
産業科往来	5本	江戸	2	京都	2	大坂	1				
女子用往来	31本	江戸	21	京都	4	大坂	5	仙台	1		
計	197本	江戸	156	京都	20	大坂	16	仙台	5		

いう結果になるのである。

弘前市立図書館の往来物197本について、比較のために目的別分類と共に【表Ⅱ】として示してみる。教訓科往来30本では、江戸25本、京都4本、大坂1本である。社会科往来24本の内訳は、江戸16本、京都3本、大坂5本であった。この社会科往来は、秋田県立図書館には所蔵が確認できなかったものである。語彙科往来19本は、江戸16本、大坂1本、仙台2本であり、消息科往来は、41本のうち、江戸が35本、京都3本、大坂2本、仙台1本であった。

地理科往来14本では、江戸11本、京都2本、大坂1本であり、歴史科往来の33本では、江戸30本、京都2本、産業科往来5本は、江戸2本、京都2本、大坂1本という結果であった。秋田県立図書館で最も所蔵が多かった理数科往来は、弘前には所蔵が確認できず、目的別分類における相違点であるといえよう。女子用往来31本では、江戸21本、京都4本、大坂5本、仙台1本であった。つまり、江戸が圧倒的に多く、産業科往来のみ江戸2本に対して、京都2プラス大坂1本の計3本と関西圏が多い。総計すると、197本中、江戸が156本、京都20本、大坂16本、仙台5本であり、江戸の出版が圧倒的に勝っていることがわかるのである。

秋田県立図書館所蔵資料の出版地別分類の結果を【図1】に弘前市立図書館所蔵資料の出版地別分類の結果を【図2】に示した。出版地別の割合がよくわか

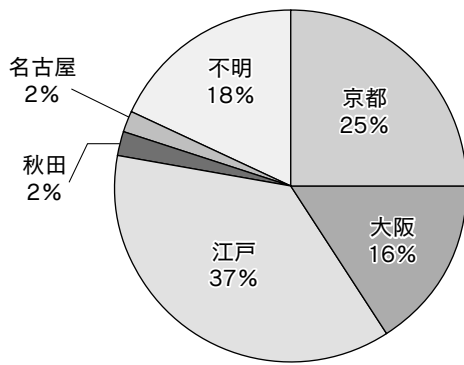
るであろう。

3-3 弘前・山形・酒田との比較

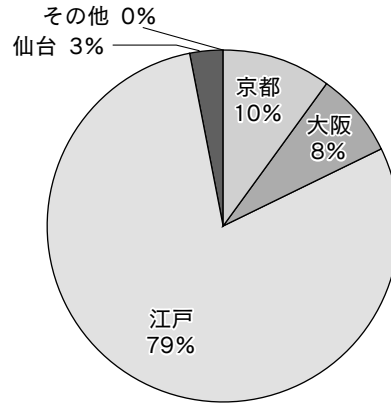
弘前だけでなく、山形県の状況についても考え合わせてみたい。山形県立教育資料館は、山形市に所在しており、内陸地域であり、酒田市立光丘文庫は、日本海沿岸の酒田市に所在しており、沿岸地域といえる。この両館の所蔵資料についても、出版地別分類の結果は興味深く、【図3】【図4】のような違いがあった。

これら【図1】～【図4】の円グラフは、出版地域ごとの割合がわかりやすく提示されているものであるが、それだけでなく、江戸や京都、大坂といった三都以外の地方における出版についても知らせてくれている。少数ではあるが、仙台、名古屋、奈良、山形といった地方出版の事情についての一端が示されており、出版文化や流通の有り様を考えるひとつの参考ともなるであろう。

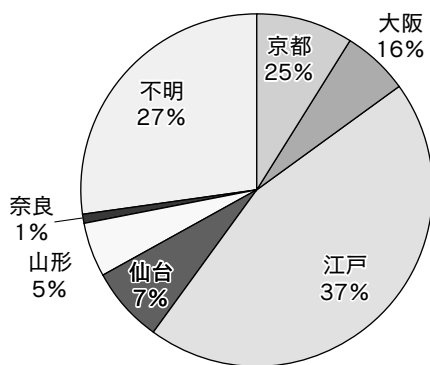
参考までに出版地域をそれぞれ、江戸は単独で江戸、関西圏として京都と大坂を合わせて関西とし、東北圏として仙台と山形を合わせて東北、東海圏として名古屋と伊勢を合わせて東海、そして不明の五か所のエリアに分類してグラフ化し、【図5】にまとめてみた。



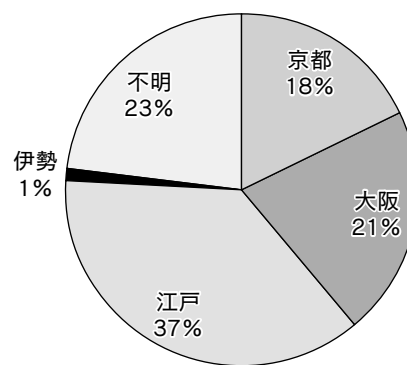
【図1】秋田



【図2】弘前



【図3】山形



【図4】酒田

【図5】からは、秋田と酒田におけるグラフの形状が似ており、江戸と関西が拮抗していることが明らかに示されている。一方で、弘前と山形におけるグラフの形状は、最も左の江戸出版部分が突出して抜きんでていることが明らかであり、江戸の出版の多さが目立つグラフといえるであろう。往来物資料という一部の所蔵資料の結果であるが、以上のように内陸部では江戸の出版が多く、日本海沿岸では関西圏の出版が多いという、偏在傾向が明らかとなったといえるであろう。

【図6】は、弘前、秋田、山形、酒田のそれぞれの所蔵数もわかりやすく提示するために、エリアごとの出版数を棒グラフに表示したものである。最下部分にあたる江戸出版の割合と下部二番目にあたる関西圏の割合が比較しやすいであろう。また、往来物資料の所蔵数に対する割合もわかりやすく明示されている。

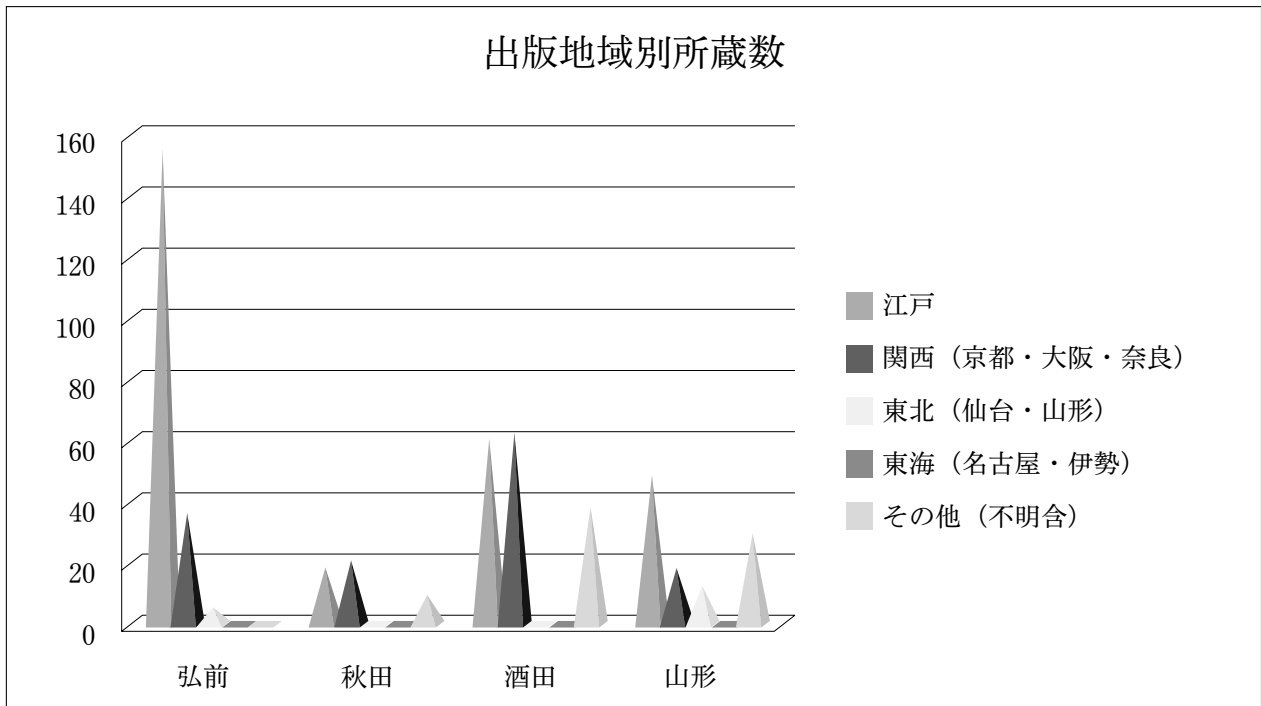
4 まとめにかえて

秋田県立図書館所蔵の往来物資料について、その一

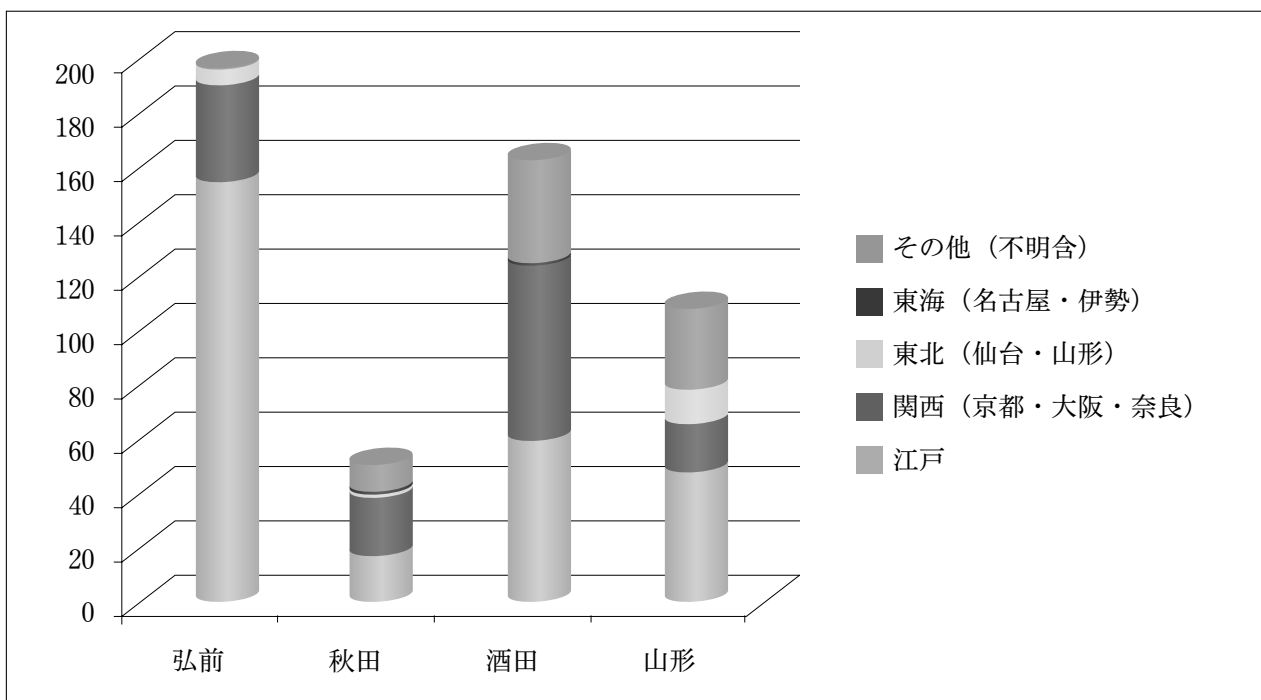
面を紹介してきた。今回、調査対象であった近世期の版本である往来物資料は、51本を数え、それらを目的別に分類整理してみると、理数科往来の所蔵が多いといった特徴的な傾向がうかがえた。他方、出版地域について検討してみると、江戸が37%、京都25%、大阪16%と江戸が最も多いという結果となった。しかし、京都と大阪を合わせた関西圏というくくりで考えると、江戸の37%に比して、関西圏41%となり、逆転するのである。

弘前市立図書館は、他地域に比して所蔵往来物資料数が圧倒的に多く、197本であり、目的別分類の内訳をみると、最も目につくのは、著名な『庭訓往来』を含む、消息科往来であった。そして、多数の往来物資料を有する弘前市立図書館において、所蔵が見られない領域のものが、理数科往来であり、この点で秋田県立図書館との差違が明確となった。出版地域においても、秋田とは全く傾向が相違しており、江戸の出版が圧倒的に多く、全体の79%を占めていた。

一方で、山形県の状況を加えて考えてみると、内陸部の山形市に所在する山形県立博物館教育資料館で



【図5】



【図6】

は、総数109本の往来物資料において、江戸の出版が45%で、京都9%、大阪6%であった。そして仙台のものが7%と他地域の資料に比して多いことが注目され、山形の出版も5%存在した。他方、日本海沿岸の酒田市立光丘文庫は、総数163本のうち、江戸が37%、京都18%、大阪21%であった。京都と大阪を合わせて39%になるため、江戸より若干関西圏が勝っているこ

とが判明した。

秋田と酒田では、江戸より関西圏の出版が多く、弘前と山形では江戸が圧倒的多数であった。つまり、日本海沿岸地域である秋田と酒田には、関西圏からの文化流入がより鮮明であり、内陸部の弘前と山形には、関西圏より江戸からの文化流入の傾向が勝っていると考えることができる。

江戸時代には、西回り航路の北前船が東北に関西から直接物資を輸送していたことが知られているが、物資の中には書籍といった出版文化も含まれていたものと思われる。物資とともに出版を含む関西文化が、日本海沿岸の地域には直接にもたらされ、受容されていたと考えられ、往来物資料の出版地域による偏在傾向は、陸路だけでなく、海路によっても文化が運び込まれていたことの傍証になるといえよう。

本研究は、往来物資料を分類整理した報告にすぎないが、広い意味において、東北の地域性や文化的特質を考える際のひとつの視点として重要であり、それぞれの地域における社会的基盤や教育背景などの要因としても参考になるといえるだろう。

注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書10巻 武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察—山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。
- 2) 上田晴彦氏は、江戸期の秋田県地域における庶民の自然観についての考察のなかで、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)に言及されている。上田晴彦『夜籠雑談話』における天文数値及び挿絵に関する調査研究(「Memoirs of Faculty of Education and Human Studies Akita University (Natural Science) 67.2012年」参照)。
- 3) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)を参考とした。拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)参照。
- 4) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、大学教育学部研究紀要第103号、2010年3月)参照。
- 5) 『酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—』(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物について—目的別分類からの考察—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、「山形における江戸時代の書籍流通について—往来物資料の出版地域からの検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)参照。
- 6) 石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)の178~190頁参照。「理学類」の項目で「江戸時代は、自然諸科学およびこれを支える思想がじゅうぶんに発達普及しなかったから、必然的にこの方面にかかわって作られた往来の種類は少ない。」とある。
- 7) 日本書誌学大系『近世書林板元総覧』(青裳堂書店、1981年)、日本書誌学大系『日本出版文化史』(青裳堂書店 1978年)、中野三敏監修『江戸の出版』(ペリカン社、2005年)、長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)等参照。

付記

貴重な文献資料の閲覧許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、弘前市立図書館、秋田県立図書館、山形県立博物館教育資料館、酒田市立光丘文庫の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成25年度 科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号23520541)の助成による研究成果の一部である。

(2013.12.18 受理)